

# 徳川時代における日露交渉

三 浦 信 行

## 目 次

- |   |              |    |                |
|---|--------------|----|----------------|
| 一 | カムチャツカと日本漂流民 | 七  | ゴローフニン釈放後の日露関係 |
| 二 | ロシア人の千島侵攻    | 八  | 下田条約の締結        |
| 三 | ラクスマン使節の訪日   | 九  | ムラビーエフの訪日      |
| 四 | レザノフ大使の訪日    | 十  | 竹内使節と四八度線      |
| 五 | レザノフの復讐      | 十一 | 小出使節と暫定規則      |
| 六 | 日本の再復讐       |    |                |

## 一 カムチャツカと日本漂流民

一 ロシア人が日本の存在に着目したのは、徳川幕府の鎖国時代であつて、起因はウラジミール、アトラソフがカムチャツカを征服し同地に日本の漂流民が現われたこと（註一）にある。ピーター大帝は一七〇五年カムチャツカから露都（今日のレニングラード）に送られた日本の漂流民伝兵衛なる者を引見し、ロシア人に日本語を教えるよう命

ずるとともに、役人たちに日本に関するより精確な調査を行うことを命令した。一七一〇年カムチャッカの海岸に漂着した日本船の乗組員一四名のうち四名（他は土人に殺害さる）は露都に送られ、そのうちの一名は一七一四年伝兵衛とともに日本語の教師を命じられた。

一七一四年ピーター大帝は日本を調査するため、第一回の調査隊を派遣したが、同隊は途中遭難して目的を達しなかった。一七一六年第二回の大調査隊がヤクーツクを出発したが、これまた日本には到達しえなかった。一七一九年ピーター大帝は地質学者にして航海者たるルージンに「クリル（千島）諸島および日本」の調査を命じた。この第三回調査隊は一七二一年五月二日オホーツク港を出発し、カムチャッカの沿岸を経て、千島列島の「第五島」まで到達したが、種々の困難にあつて、カムチャッカ西岸のボルシエックに引返した。当時オホーツク港の港長に与えたピーター大帝の命令書には、もし日本人が漂着してもこれを掠奪することなく、日本に送還して日本との和親の手掛りとなし、貿易開始の手段にするよう訓示したとある（註二）。

一七二九年薩摩の船舶二隻がカムチャッカに漂着したが、乗組員は二名の少年を残す外全部殺害され財物は掠奪された。生存せる漂流民宗次（当時一一歳）と権次（年齢不明）は、一七三四年露都に送られ、宗次はクジマ・シュリツツ、権次はデミヤン・ポモルツトフと改名され、一七三六年学士院設立の日本語学校の教師にされたが、宗次は同年、権次は一七三八年死亡した。

一七三三年 勅令により北氷洋、カムチャッカ、アメリカ、日本の沿岸調査を目的とする調査隊が組織され、大学教授三名と学生六名がこれに参加した。当時学生であった植物学の泰斗クラシニコフ教授は、普くカムチャッカ全島を縦横に旅行視察して「カムチャッカ誌」なる著書を発表した。それには千島、蝦夷、松前、日本、樺太などに関する

る記事もかかげてある。

## 二 ロシア人の千島侵攻

一 一七四〇年カムチャツカのコザック兵司令官に任命されたコレソフは千島列島を南下したが、島民の大部分は逃れ、ロシアに貢物を献げた土民は極めて少数であった。しかし千島の経略に最も関心を寄せた人物は、さきにベーリングの探險隊に参加したシパンベルグなる者で、かれは一七三二年ベーリングがカゼリン一世に、千島の占領と日本との通商開始を建言した際、ベーリングから日本方面の調査を命令された。それがためにかれは一七三五年オホーツクに赴き、造船と航海の準備を行い、一七三八年六月一八日自ら船長となり、ワルトンおよびシエルチング少尉を船長とする。他の二隻の僚船とともにオホーツク港出発、しかし、千島第一島付近で濃霧にあい僚船と離れ、単独で千島諸島の南下をつづけ、千島二十二島に上陸することなくそれぞれ命名し、同年八月三日北緯四五度五分のウルップ島に到着した。しかし海路の險難と糧食の欠乏のため、そこから引返したが、ワルトン船長の乗船は北緯四三度二分まで南下している。第三のシエルチング船長の乗船も格別の成績をあげることなくボルシェリエック港に帰港した。

二 翌一七三九年五月二一日シパンベルグは、新造船一隻を加え、四隻を率いオホーツク港から再び千島に向つ

た。途中六月一四日僚船と別れたシパンベルグの乗船のみは、本州の陸岸を望見しつつ南下し、北緯三七度三〇分金華山沖に碇泊し、陸岸から出張した仙台藩の検分官と会見し、八月二九日 オホーツク港に帰還した。ワリトンの乗船は北緯三三度二八分の房州海岸まで来航し、飲料水を求めた上、七月二三日ボルシェリエックに帰港した。

三 シパンベルグはベーリングに航海調査の結果を報告するとともに、ロシア領に近い千島諸島は既にロシアの領土に併合されたと告げ、その他の諸島も征服は容易のようだとし、その実行を進言するのみならず、自ら露都に赴き政府に実行を建言したが、ロシア政府はこれを納れず更に調査を続行するよう下命した。それがためシパンベルグは一七四二年五月二三日三度千島探險の航海に出発したが、濃霧、風浪、船体脆弱などのため失敗して空しく帰還した。

右の金華山沖と房州海岸に来航したロシア船が、日本に来航した最初のロシア船であって、その報に接した老中松平近衛将監は、勘定奉行神尾若狭守をして、海防を嚴重にすることを命じた。

四 シパンベルグの調査以来、ロシア人の千島に来往すること頻繁となり、遂には千島を領有せんとするに至った。

(1) 一七四三年ベーリングの調査隊の一員チリコフはロシア政府に対し、日本との通商を開始し、日本に近い千島列島を占領し、そこに要塞の築造を建議した。

(2) 一七四四年マカンルシ島で日本人に会った ヤクーツクのロシア人は、その日本人から国後島で貿易を行いたいとの提議をうけた。

(3) 一七四五年ロシアの収税官は千島第五島で日本人に遭遇している。

(4) 一七六三年イルクツクの知事は同地在留の日本人から、千島二十一島は日本の所属でないと聞き、オホーツクの長官に千島を踏査し、土民をロシアの国籍に入れるよう命じた。その目的のため派遣された二名の吏員は、一七六六年まで三年間千島諸島に滞在し、択捉島まできて土民を搾取し横暴を極めた。同年かれらは択捉島からウルップ島に帰って冬営し、翌年ラシュア島に現れ島民を掠奪し、船を盗んで去った。

(5) 一七七二年イルクツクの知事は侵略的意図をもって、カムチャツカの長官に千島と日本諸島を踏査する遠征隊の組織を命じた。長官は商人レベデ・ラストチキンに船舶を提供せしめ、日本語に通ずるアンチピンなる者を乗込ませ、日本の国土と軍備を偵察せしめんとした。

一七七五年六月二四日ペトロパウロフスクを出帆したこの船は、千島第十八島（ウルップ島）辺で難波した。翌年レベデフが組織した遠征隊は一七七七年九月一〇日オホーツクから出帆し、ウルップ島に到って冬営し、翌年春千島第十九島（択捉島）を侵し、住民を征服した上更に第二十二島蝦夷厚岸に達し、松前藩士と会し、国後島（第二十島）に商品の見本を携え貿易を求めた。翌一七七八年九月七日かれらは商品を積んでウルップ島に現われ、ここを根拠として翌年春七隻の小船に四十五人を乗込ませ厚岸に派遣して貿易を求めたが、松前藩では貿易は国禁だから以後は渡来も無用だと説示したところ、ロシア船はウルップ島に引揚げたが難波した。

一七八五年数人のロシア人がウルップ島から択捉島に現われ冬営したこともある。かくのごとくレベデフなどの遠征隊は、オホーツクやカムチャツカを根拠として、千島への進出を一八〇〇年まで継続したが、日本側に貿易の国禁があるのでその後は断念したようだ。しかし当時ウルップ島以北の千島列島は既にロシアの

勢力下に陥り、殊にウルップ島には毛皮獣を獵獲する基地が設けられ一八六三年まで存続した。

五 一七七〇年当時ロシア領であったポーランドにおける叛乱に参加した罪でカムチャッカに流されていた、ハンガリー生れのポーランド貴族モリツ・ベニオフスキー伯爵（一七四六年生れで、日本の文献にはハンペンゴロとある）は、翌年四月二六日他の流罪者と共謀して叛乱を起し、銃砲、弾薬のみならず、船舶を奪い、ボルシェリツク港から出帆して南下し、千島列島に沿い日本の沿岸を航行して、八月三日三崎（一説には伊豆の下田）、八月一〇日土佐湾、八月一五日琉球、八月二八日台湾にそれぞれ寄港している。

しかし伯爵は日本などに対しなんら異国をいただくものでなく、日本においては相当の待遇をうけている。伯が奄美大島から長崎のオランダ人に送った書簡には、「ロシアが日本に対し陰謀を企て、既に千島に砦を築き、武器を備え、おそらく来春にもなれば、蝦夷松前を攻略するだろう」と警告し、徳川幕府に北方警備の急を感じしめた。その結果一七八五年（天明五年）幕府は、普請役山口鉄五郎外四名を、千島、樺太の北地視察に派遣した。この一行に加った最上徳内は、同年ウルップ島まで視察を行っている。それから五年後の一八〇〇年（寛政一二年）には、近藤重蔵が択捉島に「大日本恵登呂府」なる標柱を樹てている。

### 三 ラクスマン使節の訪日

一 一七八五年八月一八日カゼリン二世（ピーター大帝と並んでカゼリン大女帝とよばれた英邁なロシア皇帝）は、ヨシフ・ビリングに命じ、太平洋東北部の探検隊を組織し、日本との通商開始の任務をも与えた。しかるにビリングの探検隊はチュコト地方（ベーリング海峡からニイジネ・コルイムスク間）を航行調査したのみで、日本には来航しなかった。翌一七八六年一二月二二日カゼリン二世はムロフスキーに世界周航を行わしめ、同時に千島諸島、樺太、日本、アムール河口を調査し、アジアとアメリカに新領土の発見を命じたが、ロシアがトルコおよびスウェーデンとの戦争に入ったため実現しなかった。

二 一七八三年一月船頭幸太夫（光太夫）と磯吉は、伊勢から江戸へ回米の途中遠州灘で暴風雨にあい大島に流され、八カ月後にアレウト島に漂着し、一七八七年カムチャッカに送致された。

当時イルクックでシベリアからインドへの航路を研究し、日本の事情を調査中であつた。キリル・ラクスマン教授の請いによって、幸太夫と磯吉をイルクックに呼寄せた。教授は幸太夫らの希望により二人を伴い露都に赴き、カゼリン二世に謁し、漂流民送還をもって日本との通商開始の端緒となすべきを上奏したところ大女帝はこれを容れ、一七九一年九月一三日日本との通商関係設定に関する勅命が下された。

この使節団の団長にはラクスマン教授の子息アダム・ラクスマン中尉（当時二六歳）が選ばれ、一行は一七九二年九月一三日オホーツクを出航し、択捉島付近をすぎ、一〇月六日国後島に碇泊、九月九日根室に到着し、同地の日本官憲に対し、漂流民送還と書状奉呈のため来航したもので、本年中に江戸に赴きたい旨をのべ、日本側の返事を待つたためと称し、十一月一七日上陸して、宿舎を建てそこに転居した。

三 幕府は寛政三年（一七九一年）九月「外国船打払令」を發布していたが、今回のロシア使節は漂流民送還のためなるに鑑み、特にこれを松前に引見し、わが国法を諭すことに決し、宣諭使を出張せしめると同時に、津軽、南部の両藩に兵を松前に送ることを命じた。ラクスマンの一行は六月四日海路根室を出帆し、七月四日箱館に投錨した。ラクスマンとその随員十一名は陸路七月一三日箱館を出発し、四百五十人の護衛とともに松前に到着した。

松前における応援には幕府の訓令もあり失礼なき待遇を与えたが、ラクスマンの提出したイルクック総督の「書状」に関しては日本側に横文に通ずる者なく、また「贈物」に関しては国法で外国人からの受領はできないのでこれを返還し、「通商」に関しては松前に、権限がなく長崎で処理すると諭しロシア側の要請には応じなかった。またラクスマンが申出た松前藩主との面謁と江戸行とは許可しなかった。

なお ラクスマンが同伴した日本の漂流民三名のうち、幸太夫と磯吉はロシア船出航の際に日本側に引渡され、小市は根室で死亡した。

ラクスマンの乗船は八月五日箱館を出帆したが、退去に当り日本側から大長刀三振、白米六一俵、小麦二一俵、ソバ三俵、シオ漬魚肉、挽臼、篩、銅線、葉煙草二〇箱、日本紙、陶器を贈った。

なおこの一行が貿易問題商議のため、なぜ長崎に赴かなかったかの理由は、当時ロシア側が通訳が徳川幕府は毎



年一隻ロシア船の来航を許した旨をのべたこと、ラクスマンが貿易問題に関し特に訓令をうけていなかったこと、カゼリン二世がフランス革命に注意を奪われていたこと、更にイギリス、オランダの日本における貿易活動を憚ったためといわれる。

四 しかるに露都の上層階級には一七九五年、同一目的をもつ探検隊を派遣し、隊長にはラクスマン教授自身を任ずべしとの声があったが、同教授が一七九六年シベリアの駅舎で客死したためとりやめとなった。

一七九六年七月二八日カゼリン二世はイルクツク知事に対し、ラクスマン帰国後アレウト島に漂着した日本人一六名を送還し、通商開始の交渉に利用することを命じたが、同知事にかかる使節を派遣する経費のないことと、女帝自身崩御のため、沙汰止みとなった。

五 ともかくラクスマン使節の訪日は徳川幕府に重大な反響を喚起し、ロシアの野心に対する北辺防護に関する議論が盛んに行われることになり、林子平などの国防策が現われた。老中松平定信はロシア南下の形勢に鑑み、さきに天明の末年村上島之丞、最上徳内などを北方の実情を調査せしめ、一七九八年（寛政一〇年）これまで松前藩に任された北地の統轄を、幕府の直轄に移すなど、蝦夷地の開発策と沿岸防備計画を建てることになった。

#### 四 レザノフ大使の訪日

一 ラクスマン使節の日本訪問は実を結ばなかったが、露都の上層部、殊に露米会社（注三）においては日本との通商開始の希望が切実であった。アレキサンダー一世の即位前後から、露米会社が事業地に供給する物品は、イルクックやヤクーツクから陸路でオホーツク港に至り、カムチャッカを経て輸送され、毛皮もオホーツクからイルクックとキヤクタを経て、中国市場に送っているため、莫大な運賃を必要とする。故にもしこんな経路を変更して、クロンスタットから海路喜望峰を廻り、直接カムチャッカに送り、帰途毛皮は海路中国の広東市場に持込み、その売上金をもって東印度会社の物産を購入し、これをロシア本国に輸入し、進んではこれら植民地の産物を、ドイツその他のヨーロッパ諸国に輸出することが考えられていた。今やこの考案を実行に移すため、一八〇二年レザノフ（当時三八歳）とクルーゼンテルン（当時三二歳）の世界周航計画がたてられ、商務大臣ルミャンツェフ伯の賛同をえ、皇帝に奉上了したところ、アレキサンダー一世は直ちに露米会社のこの計画を裁可するのみならず、その急速な実行を命じ、かつ日本との通商開始の交渉に当たるため露米会社の重役レザノフが大使に、任命され、クルーゼンシュテルンが船隊の指揮と学術的調査の指導者にそれぞれ任命された。

二 世界周航の準備は一八〇三年完成した。イギリスからナデジダ、ネバーの二隻の船舶を買入れ、一七九三年ア

レウト島に漂流した日本人一五名のうち帰国希望者四名を送還して和親の意を表し、日本政府への贈物を携帯し、大使には商務大臣からの訓令の外、日本政府に対するアレキサンダー一世の親簡が与えられた。大使の任務は（一）さきにラクスマンが持参した書状に基き、日本から対露貿易開始の承諾を取付けること、（二）日本、千島、樺太、アムール河口、ダッタン海峡の沿岸を測量調査すること、（三）日本と中国、できれば南米、印度との貿易太平洋に面するロシア領の通商発展と地理的調査並に新領土の発見を行うことであった。

三一 一八〇三年八月七日二隻の世界周航船はクロンスタット港を出帆、翌年三月三日喜望峰を通過サンドウイチ島で両船は分れ、ネバー号はアラスカの露米会社事業地に直行しナデジダ号はカムチャツカのペトロパウロスクに赴き二カ月滞留し、三〇日を費し一八〇五年（文化元年）一〇月八日長崎に到着した。

レザノフは長崎奉行に渡航の目的を通達したところ、奉行はその旨を江戸に報告したがロシア船の港内に入ること許さなかった。しかしオランダ高館の館長ゾーフの斡旋により入港は許されたが、乗組員の上陸は許されず、梅力崎に急造された特別宿舎に上陸を許された。

レザノフはまた奉行に露帝の親簡を携帯する旨を披露したところ、奉行からその提出を求められたがこれを拒んだため、係官がこれを写しとり、その写を江戸に送った。その親簡には「ロシアはヨーロッパ諸国とは平和政策をもつて修交し、日本に対しても親善関係の樹立を希望する。カゼリン二世時代からの例に倣い日本の漂流民を送還し和親の意を表するが、今回レザノフを使節として派遣したから、日本はカジヤック、アレウト、クリル（千島）諸島のロシア商民に対し、長崎のみならず、他の諸港においても、また一隻のみならず多数のロシア船舶の入港を許可されたく、ロシアにおいては日本の商民と船舶との渡来を歓迎するにつき、それに関しロシア使節と交渉されたく、また使

節に託して国産品を贈る」とあった。

四 幕府は容旨に態度を決定しえなかったが、六カ月後に漸く遠山左衛門尉を正使として長崎に派遣し、レザノフと会見せしめ、日本は百五十年来、日本人の海外渡航を禁じ、外国人の入国はオランダ人と中国人と琉球人の外は許さず、その後朝鮮人と琉球人の渡来をも禁止した。これまで諸外国から日本との修交通商を望んだが、国禁はいかともしがたく、十三年前にはラクスマンの訪日があり、今また露帝再び使節を派遣して親善の意を表せられるは欣快にたえないが、大使も贈品もこれを受納しえないとに決したこと、貿易については日本の消費は大ならず、外国品はオランダ人と中国人のものでこと足り、この上外国品を輸入することは国民の贅沢を助長するので、広い貿易は許し難いと回答せしめた。

一方長崎奉行からは露船の退去を求め、他の諸港に寄港することも禁じ、また今後漂流民にして帰国を希望する者あれば、オランダ政府に引渡されたいと通達した。

レザノフは初の漂流民を直接幕府に引渡すつもりで、長崎奉行への引渡を拒否していたが、漂流民の一人に自殺未遂事件があったので長崎奉行に引渡を申出たところ、今度は奉行が江戸から命令がないといって拒否した。結局出帆間際に長崎に置去したのである。

レザノフは出島のオランダ館の訪問、寺院の見物、薬草の採取などの許可を求めたが、いずれも拒否された。レザノフは幕府から供給された食塩二百俵、白米百俵の受納を拒否したが、最後にはこれを受入れ、ナデジダ号は一八〇六年三月一九日長崎を出帆した。

一方、クルーゼンシュテルンは長崎から対島海峡を経て日本海に入り、杵岐、対島、本州、九州、蝦夷（北海道）

の海岸を測量し、津軽海峡をも精密に測量し、宗谷海峡を通過、樺太海岸を調査し、樺太の久春古丹の日本村を視察し、樺太東岸を航行した後、千島を経て一八〇五年六月五日カムチャツカに到着、一〇月九日出発して澳門でネバー号と合流し、翌年八月一三日満二年目にクロンスタットに帰還した。

## 五 レザノフの復讐

一 レザノフは長崎におけるかれの使命が、日本側の決然たる態度によって、全面的な失敗に終わったことを痛く憤慨したか復讐を決意し、露米会社に雇用中の海軍士官フボストフ大尉とダビドフ少尉とを使って、一八〇六年と一八〇七年の二回、樺太と千島における日本人の居留地を襲撃し、無軌道な破壊を逞うしたのである。

すなわちレザノフはペトロパウロスクでクルーゼンシュテルンを分れ、アメリカに赴く途中一八〇五年七月一八ウナシカ島から、アレキサンダー一世に対し「堅艦を新造して明年日本の海岸に赴き、松前を寇掠し、樺太から日本人を駆逐し、沿岸住民を威嚇して漁場を奪い、二〇万人の食糧をなくするなど強圧手段によって、日本に貿易の開始を余儀なくせしめ、これをもって交渉失敗の罪をあがなわん」との上奏文を奉呈した。

二 この上奏文に対してはなんら許可はなかったが、レザノフは直ちにかれの計画を実行に移し、フボストフとダビドフは一八〇六年一〇月「樺太」の久春古丹に入寇し、運上所の番人四名を捕虜とし、倉庫の米六百俵、釜、木綿

など在庫品を掠奪し、十一カ所に放火して日本村を焼払い、十一月ペトロパウロスクに引揚げた。翌年三月自主に渡った柴田角兵衛は、ロシア人の寇掠を聞き松前に報告したところ、松前藩は松前左膳を久春古丹（楠溪）に派遣し、ロシア人の立てたロシア領たる建札その他を撤去した。

三 翌一八〇七年五月四日フボストフとダビドフは「千島」の択捉島ハイホ村の沖合に碇泊し、二百人が上陸して哨所を銃撃し、貨物を掠奪し、村落を焼払い、五月二四日には同島シャン村を襲撃した。日本側は通訳と五人の軍使を送って交渉せしめんとしたが、ロシア人から一斉射撃をうけた。ロシア人は翌日再び上陸して十一棟の倉庫を掠奪し、五月二七日択捉島を去ってウルップ島に赴いた。しかるにウルップ島のロシア人は一八〇三年疫病のため死亡または退散し住民がいなかったので、ロシア船は箱館に来てこれを砲撃し、悠々と津軽海峡を通過し、六月一日樺太のアニワ（亜庭）湾の留多加村の沖合に碇泊した。ここには日本人がいなかったので、ロシア船は再び松前に向い利尻島付近で、日本船四隻を襲いその積荷を奪い、船体を焼き、更に利尻島番屋にまで放火し、日本人の捕虜はウルップ島と択捉島に棄てて日本を去り、七月一六日オホーツクに帰った。

四 フボストフとダビドフはオホーツクから、政府とレザノクに日本寇掠の成果を報告したところ、オホーツク港長ブハリンはかれらの掠奪品の豊富なるに欲心を起し（一万八千ルーブルと評価）、許可なく行動した事を口実に兩人を拘禁した。兩人は拷問と虐待とにたえかね脱走してヤクーツクにたどりつき、イルクツク総督の斡旋で一八〇八年初め露都に帰ることができた。政府は商務大臣ルミヤンツェフ伯に兩人の行動を取調させた結果、犯罪を構成しないとの勘定をうけた。兩人はその後フィンランド戦争に功を立てたが一八〇九年一〇月四日露都のネバー河で溺死した。レザノフも一八〇七年シベリアから露都に赴く途中クラスノヤルスクで病死した（四二歳）。その後一八〇

九年露米会社はボドーシキン大尉にネバー号によって、「千島と樺太」の測量を行い、日本との通商基地として樺太のアニワ湾を占領すべき命令を与えたが、二年後にボドーシキンはなんらの成果をあげず帰還した。

## 六 日本の再復讐

一 幕府は樺太におけるフボストフらの寇掠の報に接するや、応急の措置として北方の警備を強化し、従来の南部、津軽の両藩の外に、会津、仙台両藩からも、北海道に出兵を命じ、若年寄堀田摂津守を総督として派遣し、一八〇七年三月には蝦夷本島（北海道）、千島、北蝦夷（樺太）の全部を幕府の直轄地にした。翌一八〇八年（文化五年）には、間宮林蔵と松田十郎をして樺太を探検せしめ、間宮林蔵は白主から樺太西岸を北航し、翌年デカストリーの北方から大陸に渡り、キジ湖を経て東部ダッタンのデレンに至り、アムール河を下って帰国し、樺太が半島でなく離島たることを発見した。これはロシアの探検家ネベルスコイが同一の発見をした四十二年前のことだ。

二 千島、樺太におけるレザノフの復讐に対する日本側の再復讐の機会は、日本人が予期したより早く現われた。一八一一年日本人はロシアの海軍士官ゴローフィン大尉を捕え、二年有余かれを抑留した。すなわち一八〇七年ワシリイ・ゴローフィン大尉（三一歳）は、ロシア領アジアとアメリカにおける未知の土地を調査する命をうけ、テイアナ艦の艦長として同年七月六日クロンスタットを出帆、一八〇九年九月二三日カムチャッカに到着、同半島の各地を

巡視した。

しかるに一八一一年四月かれは海軍大臣から、千島諸島の南部、シャンタル諸島、並に北緯五三度三分からオホーツク港に至るオホーツク海沿岸の測量を命ぜられ、七月五日 国後島に上陸したところ、七月一日ムル少尉外六名とともに日本側に捕えられ箱館と松前に監禁された。テイアナ艦副長リコルドはオホーツクに帰航して、ゴローフィン逮捕の顛末を報告し、次いでイルクツクに赴きゴローフィン救出のため軍艦の派遣方をロシア政府に要請したが、当時ロシア政府はナポレオンの戦争に忙殺され、軍艦の派遣は不可能だとし、単に千島その他の海岸測量の続行を回訓した。

三一八一二年七月リコルドはディアナ艦で運送船を率い日本の漂流民六名を伴ってオホーツクを出発、八月二八日国後島に到着、漂流民五郎次をして日本官憲に対し、ゴローフィンの釈放方を申入れしめたがなんらの回答もなかった。そこでリコルドは九月六日択捉島から松前に向う日本船観世丸を海上に襲い、船主高田屋嘉兵衛外三名と土人一名を捕え、カムチャッカに連れ去った。

翌一八一三年四月リコルドはイルクツク総督から、カムチャッカの長官に任命され日本との交渉を行う命令をうけた。五月六日ペトロパウロスクを出発、二六日再び国後島に到着、ゴローフィン釈放の交渉を始めた。リコルドは高田屋嘉兵衛の人物才幹を高く評価し、同人に信頼すること厚く、嘉兵衛もまた熱心かつ適切な斡旋を行った結果、七月二七日幕府差遣の吟味役高橋三平から、リコルドに対しゴローフィン釈放の条件として（一）フボストフが千島、樺太で寇掠したことは、ロシア政府の関知しないことで、全部かれの私意に出たことを証明する公文を日本政府に送付すること、（二）フボストフが掠奪した物品のうち腐朽したものは問わないが、武器殊に銃砲のごときは日本に返



還し、もしその武器が探索しえない場合は、その理由を説明する陳謝状をオホーツク長官から差出すこと、（三）これらの書類を提出すれば、幕府に上申して囚人放還の手續をとると伝えた。

これに対しリコルドはオホーツクに赴き、右の書類を持参して箱館に来航すると約束して、七月二十九日出帆一旦帰国した。九月二日かれは約束通り箱館に再来し、約束の書類とイルクック総督から松前奉行宛の囚人釈放に関する書簡を差出し、茲に事件は解決し、一〇月七日ゴローフィン以下の囚人を受取り、幕府から供給された糧食、薪水をうけて一〇月一〇日箱館を出帆した。

ゴローフィンは十一月二二日ペトロパウロスクに到着、陸路オホーツクを経て一八一四年七月二二日露都に帰着した。かれおそびティアナ艦乗組員一同は昇進その他の賞をうけた。なおゴローフィンは一八一七年八月二六日再び世界周航の途に上り、南米を経由し、翌年五月カムチャッカに来航したが、日本には立寄らず、ベーリング、アレウト諸島を廻りマニラを経て帰国した。

## 七 ゴローフィン釈放後の日露関係

一、ゴローフィン釈放に関連して一八一三年リコルドが持参した松前奉行宛イルクック総督の書簡には、日露間の国境を確定したい意図を表明したものがあったので、リコルドは箱館を去るに臨み、これに対する日本側の回答を受

領するため、明年再びウルップ島に来航すると申し残していた。これに対し幕府は松前奉行にもしロシア人が来航したら、「択捉島は日本の領土であり、シムシリ島（占守島か）はロシアの領土であり、ウルップ島は中立」たることを知らしめ、「もしロシア人が択捉島を奪わんとする場合、かれらを打払うため必要な措置」をとるよう命令した。

二 一八一四年イルクック総督はロシア船を択捉島まで派遣して交易を求めたが回答をえなかった。翌一八一五年（文化一二年）には国後島までロシア船を送り、同年更に薩摩の船頭喜左衛門外二名の漂流民を送還するため、イルクック総督の書簡を携え、オホーツクから択捉島のシベトロ岬に来航したが、陸上に人影を見ないのでカムチャッカに帰った。一八一六年には未送還の薩摩の漂流民三名と、一八一三年漂着した尾張の船頭長右衛門外一名とを乗せたロシア船が択捉島まで来航したが、濃霧のため上陸不能なので、漂流民だけを小舟で陸地に送って去った。一八一七年ロシア船はウルップ島まで来航したが、ロシア政府はゴローフィンの意見を容れ、「露米会社にウルップ島以南にロシア船を送ってならない」と命令したので、その後は一八三六年まで日露両国人間にはなんらの交通がなかった。

三 一八二五年（文政八年）二月、徳川幕府は「異国船無二念打払令」を發布した。直接の動機はその前年イギリス船が薩摩の宝島に侵寇したことにある。しかし一八一六年以来一〇年間、日本へのロシア船の来航は止んでいたが、一八三六年（天保七年）露米会社は日本との通商開始に漂流民の送還を利用する従来の政策を復活し、オルロフ大尉指揮の汽船を北海道の厚岸に入港させたが、日本側から砲撃をうけ退去し、択捉島に漂流民を残して帰国した。

四 しかしロシア政府および露米会社の日本に対する方針はその後も変化なく、一八四三年露米会社は八名の日本人漂流民を送還するため、ガブリロフ大尉の指揮する船舶で厚岸湾に来航し、漂流民を小舟で上陸させんとしたが、

住民が逃げていないため目的を達しえなかった。そこで海上で通航の日本船に引渡さんとしたが、これまたさけて引取らず、やむなく択捉島に赴き同地の役人に引渡した。当時幕府は阿片戦争における中国の敗北を知り、外国船に対する態度を変更し、一八四二年七月既に「異国船打払停止」を發布して間もないときでもあり、またガブリロフが友好的精神で努力したため、日本の役人は漂流民を受取るのみならず、ロシア船に必要なあらば薪水、食糧など供給する旨を伝えた。

五 ガブリロフ大尉の漂流民送還の成功によって、従来の方針を更に進展せしめんと決定した露米会社は、一八四四年二月通商開始の目的をもった船舶を、ガブリロフ大尉指揮の下に派遣する勅許をうけた。大尉は択捉島の役人あてに、前年の友好的態度を謝しかつ寄港地指定方を請い、もしも択捉島で確答がえられない場合は上司に請訓されたいとの書簡、並にリコルドから日本人の知人にあてた紹介状、および贈物を持参し、翌年択捉島に来着したが、前年識った日本の役人は死亡し、また通訳がいないため意思を通じえず、殊に日本官憲が書簡も贈物も受領を拒否したため、なんらの成果をあげえなかった。

六 一八五〇年ニコラス一世は露米会社に対し、政府の経費をもって、カムチャツカに送られた漂流民七名を日本に送還することを命じた。しかし会社はさきの経験に顧み通訳の必要を認め、先ず漂流民にロシア語を教え、かれらを通訳に使用する準備を整えた。一八五二年七月二六日下田に来航したリンドベルグは下田奉行に日本の漂流民送還の旨を通じたところ、奉行はその厚意を謝すとともに、漂流民の受取には江戸に請訓を必要とすると答えた。しかるに八月二日小田原藩の代表者から右の漂流民は受取りえないこと、並に武装外国船は速やかに立去るべきだと論じたので、リンドベルグは漂流民はかれらの希望に任せ、小舟に移して下田を出帆、中国に向った。

## 八 下田条約の締結

一 一八五三年四月ニコラス一世は東部シベリア総督ムラビーエフの稟議を容れ樺太占領の勅令を發布し、海軍省は露米会社（註三）に占領事業の実施を依託し、少くとも百名の移住部落を維持する代償として、五万ルーブルを下付し、ネベルスコイを全事業の指揮監督者に任命した。会社は上陸軍隊をカムチャッカから、必要物資をアヤンからそれぞれ輸送し、ネベルスコイは同年九月二〇日樺太のアニワ湾に上陸し、日本人の経営する久春古丹に近接する山上に、総督に敬意を表した「ムラビーエフ駐兵地」を続け、五八名の兵士と大砲八門の砲台を築造した。また北部樺太に数カ所の駐兵地を設け、石炭の採掘を始めた。

二 一八五二年ニコラス一世はアメリカが日本に艦隊を派遣して開国を迫るとの報をえたので、ネッセルロード首相にロシアも日本に使節を派遣するよう下命し、大使には海軍中將プーチャチンが選ばれた。大使の率いるロシア艦隊（五隻）は一八五三年（嘉永六年）八月九日長崎に入港した。

長崎奉行は、大使が携帯した老中あてネッセルロード首相の書簡を受領し、これを江戸に急報した。この書簡には「ロシアは大国であって、領土拡張の意思はないが、ロシア人民の当然の権利を保護する必要上、両国の境界を確定する必要があること、日本は開港してロシア人民に交易を許し、かつカムチャッカのロシア領アメリカに往来するロ

シア艦船の寄港、食糧品その他の必需品の補給を許可すること、そのためプーチャチンを全権に任じ派遣するか、相当の礼遇を与え、右の交渉に応ぜられたい」とあった。プーチャチンは国境確定に関する談判は重大問題だから、老中またはそれと同一地位の役人が長崎に来るか、しからば自分が江戸に赴いて直接幕府と交渉したいと申出した。

三 しかるに日本側は將軍家慶の死去を口実に回答を引延ばしていたので、プーチャチンは同年十一月六日ネッセルロード書簡を敷衍して、交渉条件を明かにした次の書面を提出した。それによると第一の国境確定問題は移住民を送る必要上緊要であるとし、クリル（千島）諸島はロシア領に属し、ロシアの統治をうくべきであること、択捉島の一部には日本人も雑居し、ロシアの漁民も居住しているから、その所属を決定する必要があること、樺太は土民のみ居住し、ロシアの支配をうけ、最近三カ月ロシア皇帝の命により、ロシア領として軍隊を常置していること、日本人にして漁業および商業のため、同島南部アニワ湾に来る者は少数だが、かれらに対しては、ロシア国民と同様な保護を与えること、第二の交易問題に関してはロシアの艦船のため、交渉上便利な江戸に近い一港、および蝦夷（北海道）に一港を開港されたいとあった。

四 幕府は日本側全権として筒井肥前守、川路左衛門尉を長崎に派遣し、ネッセルロード書簡に対する幕府の返書をプーチャチンに手交した。それによると「貴国政府は境界不明晰なので、全権を派遣して会商せしめんとせらるるも、辺藩のことは図籍など慎重に調査して、十分な証拠によって査究を必要とするため、今日直ちにこれを処理することはできない。また貿易来往のことは往年ロシアから開市の要請があったが、国禁あるがためこれを固辞した。しかるに方今世界の新事態に鑑み、本件は『古例をとって今事を律する能わず』、殊に先般アメリカその他の諸国と

も、開市を求めているので、本件は十分慎重に考慮を加うべきも早急には決定しえない。かつ重大事項は必ず京師に奏上し、列候群官の意見を徴し、協同商議して、国論を一定せざるべからず。これがためには三、五年の時日を要するので、坦懐にその期を待たれなく、ロシアとは隣国であるから、丁重を加うべく、よって重臣を長崎に遣わし、プーチャチンと会見せしむることにした」とあった。老中首席阿部伊勢守は、筒井、川路の両全権に対し、「開国 通商」の件はなるべく延期すること、「国境確定」の件は樺太においては北緯五〇度をもって境界とし、千島においてはなるべくウルップ島をわが有とするよう尽力されたいと訓令した。

五 長崎における日露両国全権の交渉談判は、一八五三年一月二〇日第一回が開かれ、ロシア使節は冒頭から国境問題を持出し、千島列島のうち択捉島は、五〇年前ロシア人が発見して居住したところ、その後日本人が来て居住するようになった。ウルップ島はそれ以前既にロシアの領土であるから、千島全部はロシア領土である。また樺太は先年ロシアがアムール河口に進出した際、同島の住民がロシアに帰属を願ったので、ロシア皇帝はこれを容れ、その保護のため軍隊を駐屯させたものだ。日本人は少数の居住民が南部にいるのみだとのべた。

これに対し川路全権は蝦夷千島はカムチャッカまで日本の所領であって、その名も蝦夷語であるにかかわらず、ロシア人がこれを蚕食して改称したものだ。その後五十年前ゴローフィン蝦夷千島に来航し、ウルップ島をもって間島とする契約を行った。それ以来日本は択捉島は外国人の入国を許さず、番所を設置している。樺太南部も同様であって、日本の番所が設置され、日本の所領たること疑いないと反駁した。

プーチャチンは日本人が居住し、番所を設けている樺太南部地方には、決してロシアから手出しをするものではないが、北部および中部はロシア領だから、その境界を早々に確定したいと答えた。その樺太分界線に関しては一二月

二二日の第二回會議で、川路全権から北緯五〇度以上の線をもってする意思はないか、またその線が決定した上はその線以南のロシアの軍隊は引揚げざるかを質問したところ、プーチャチンは日本人の居住する土地、および日本官憲のいる地方はロシア領とは思わないが、ロシア人巡視の際アニワ湾には、日本人の居住者は二〇名位にすぎないとのべ、境界確定の上は日本所領内のロシアの軍隊と人民とは引揚げると答え、軍隊の駐屯は日本領を侵略せんがためではなく、外国の侵略企図を防ぐがためだと付言した。

ロシア側は頻りに境界の確定を急ぎ、大体のところを取極めておき、来春双方が現地において立会の上決定することを主張し、明春三、四月頃までに、右役人の出張なきときは、ロシアは移民を送ると申立てたので、一二月二六日第四回會議において川路から現地見分のため役人を出張さす提議を行い、結局日本からその趣旨の書面を送り、ロシア側からもしその期日を延ばすことあれば、ロシア人が日本の所領に入るようになるかも知れないとの返書をうけ交渉を打切った。

六　かくしてプーチャチンは国境画定の目的を達成せず、一八五四年一月八日長崎を出帆したが、その際筒井、川路の両全権にあて、日本全権の一月六日付書簡に、ヨーロッパの地図によると、樺太の境界は北緯五〇度だとあるも、同島にはロシア人以外の者は訪問しておらず、その地図は精確でない。現在ロシア領は遙かに五〇度以南に及び、日本の所属は南端のみだ。日本全権の資格は不十分だから、この上會議を継続することは無益だとの書面を残した。

長崎を去った　プーチャチンは琉球に立寄り、更に南下してマニラに到ったが、ロシアが英仏と開戦（クリミア戦争）したので、英仏艦隊との衝突をおそれ、一八五四年三月二三日長崎に再入港し、筒井、川路両全権あて書簡を長

崎奉行に手交した。それによると「本年六月下旬樺太のアニワ湾で、両全権のうち一人と国境問題を協議したいこと、もし日本全権来らざるにおいては、ロシア側はやむなく単独で境界を画定すること、その境界の位置は実地見分の上、この夏日本政府に通知する」とあった。

しかしかれは再び長崎を去って北の方インペラートル湾に寄港し、同地でムラビーエフ総督と会見し、一〇月三日箱館に入港し、さきに日本全権とアニワ湾で会合する約束が、戦争のため履行不能になったことを陳謝し、箱館を去って大阪湾に投錨した。幕府から大阪は対外交渉の地でないから、下田に廻航を求められ下田に移った。

七 幕府は筒井、川路の両全権の外、北方見分から帰った村垣与三郎を下田に派遣した。一一月三日の第一回会議において、プーチャチンは先づ日米談判の模様を承知したいと申出で、次いで来航の目的は第一に交易の開始、第二に国境確定だとし、その解決によって両国の和親を図りたいとのべ、もし日本側が交易を許可するにおいては、ロシア側は国境問題において「択捉島」を日本領と認め、樺太も嚴重には申さずと提議した。これに対し日本全権は交易の件は今日何分の挨拶もできないから、心永く待つよう求めるに止め、またロシア側が下田は開港場に不適當だから、代港として他の一港の外、大阪と兵庫の開港を要求した問題はこれを拒否した。

八 第二回会議は一一月五日に予定されていたところ、その前日大地震と津浪が突発し、下田は大被害を蒙り、プーチャチンの乗船ディアナ号も大破した。

一一月一三日の第二回会議においてプーチャチンはロシア側の提出した条約案を朗読した。それによると国境問題は「後来争端を開かないため、両国の境界を取調べたところ、日本所領は択捉島、ロシア領は樺太南部のアニワ港を除く、北部の樺太島は南方の尖端までロシア領と心得」とあった。これに対し川路全権は「択捉島が日本の所領



たることはもちろん、樺太もアニワからアムール河の河口まで、日本の領土なることは、取調の上明にして、その辺にロシアの所領のあるいわれはないから、『これまでの仕来通り』に据置くべきだ」と反駁し、プーチャチンは研究の上何分の交渉を行うと答えた。

九 下田の津浪で大破したテイアナ号は修理地と定めた戸田に赴く途中突風にあい十一月二八日遂に沈没したので、乗組員たちは戸田で新船の建造に取掛った。一方プーチャチンは二月一三日下田に帰来し、翌日筒井、川路の両全権と会談し、国境の画定を含む条約の締結を提議した。老中阿部伊勢守は両全権に内訓して、「堀織部正の復命によるも、樺太全島は日本の所領であって、同島にロシア人の来往は全く近来のことなるに、先方が両国境界を接している」と主張するのは、なんとも不審だから、交渉の際は樺太全島を日本の所屬にするよう精々尽力されたい。万一国境を分つに至っては、他の外国に対する国威にも影響するにつき、再三再四骨折られたく、この上もはや手のつけようがない、と一同が決定するにおいては、条約締結前請訓されたい」と申含めた。

川路全権は右内訓の趣旨に基き、境界に関する案文を「境界を分たず」とするときには、土地の入会権（共有権）のように聞え、よろしくないから、「分ち難し」とするか、しからば「蝦夷アイヌ」は日本の支配下にあるをもつて、その住居の場所は日本の所屬と記載したいとのべたところ、プーチャチンは「分ち難し」と書くことを拒否し、また蝦夷アイヌも種々あるので、後日紛議の原因になるとして承認せず、最後に「日本人と蝦夷人」の住む土地だけは、「これまで通り日本の所屬」とすることを提議した。ここで日本側は休憩を要求して合議の結果、森山栄之助をしてロシア側と交渉せしめたところ、ロシア側は「樺太島に至りては、これまで通り、日本とロシアとの間に界を分たず」と本文に記載し、付屬として「樺太島の儀は日本人と蝦夷アイヌが一八五二年まで、居住した土地は日本の

所領とする」旨を加えることを申出たが、付属は取止めとなり、結局確定条約文のごとく「樺太島に至りては、日本国とロシア国との間において、界を分たず、これまでの仕来（シキタリ）通り」と決し、一八五五年二月七日下田において、筒井、川路とプーチャチンとの間に、日露和親条約が調印された。「樺太全島に対する日本の共有権をロシアに承認せしめたのである。千島に関しては「日本とロシアとの境は、エトロフ島とウルップ島との間にあるべし」と規定されている。

## 九 ムラビーエフの訪日

一八五三年ロシアが樺太の占領と同時に急造した「居留地」は、その後間もなく撤去された。日本はこの撤去をもって、プーチャチンとの交渉でロシアが「樺太全島」に対する日本の要求を承認したものと解釈し、二二年後の樺太と千島の交換までこの理論を主張しつづけた。しかしロシアは人員の不足、英仏との戦争に樺太の防衛能力のなかったことなどの理由をあげ、その撤去が日本の権利承認を構成することを極力拒否した。一八五六年ロシアは若干の軍隊と移住民を伴い樺太に帰り、移住部落の再建を始めた。その後数年間ロシアの監察隊は樺太の各地を巡行し、更に多くの移住地を占領した。

二一八五八年プーチャチンは新に日本との間に通商条約を締結する目的をもって江戸に来航した。箱館奉行堀織

部正はプーチャチンに接触し、樺太の国境問題の交渉とともに、名寄におけるロシアの建物の移転を要求した。プーチャチンは建物の移転には同意したが、国境問題の交渉は帰国の上政府に報告し、来春にも交渉を行うことになることになった。

三 一八五八年一〇月堀織部正と村垣淡路守は幕府に対し、近日ロシア領事の来位をまって、箱館奉行をして樺太の国境を北緯五〇度とし、それ以南のロシア人はすべて退去せしむるよう交渉せしめ、領事がこれに応じない場合は、老中から書簡または使節を送って、ロシア政府と交渉されたいとの稟議を行った。その結果幕府は一八五九年三月箱館奉行竹内下野守をして、新任のロシア領事ゴシュケビッチと国境問題を交渉せしめんとしたが、領事はそんな権限を与えられていないとして拒否した。

四 この間ロシアと中国との間に重大な事件が起った。一八五八年の愛琿条約によって中国はアムール河の左岸をロシアに譲渡したため、今やロシア人はアムール河を経て樺太に到る直接の通路を獲得した。この外交上の成効は東部シベリア総督ムラビーエフの精力と政治的手腕によることは既述の通りだが、かれは中国を強制して譲歩させた手段をもって、日本にもこれを適用できると自信していた。

ムラビーエフの率いるロシア艦隊（五隻）は一八五九年五月二三日箱館に入港した。箱館奉行はロシア領事を経てムラビーエフに、樺太の国境をホロコタンと定め、それ以南にロシア人の入ることを禁じ、紛争の種を除く趣旨の書簡を送ったところ、ムラビーエフは総督というシベリア地域の最高支配者だから、総督と同等の権限をもつ幕府の高官でなければ交渉を行わないと拒否し、朝鮮に赴くに先立ち、幕府に書を送って、かれはロシア皇帝から樺太の国境問題を交渉する権限を与えられているので、かれが日本に再来以前に、幕府が全権委員を任命するよう求めた。

同年八月朝鮮から再来したムラビーエフの艦隊は品川沖に碇泊した。かれは旗艦に日本側の全権委員を招待し、「樺太は中国がロシアに譲渡したアムール地域の一部を構成するのだから、樺太は当然ロシアの一部でなければならぬ」と通告した（一八五九年一〇月一七日ゴルチャコフ首相宛ムラビーエフ報告）。これに対し日本全権はなんら弁駁せず、無言のまま引下った。

翌日ムラビーエフは完全に武装した三百名の護衛兵を引率して上陸し、宿舎に充てられた芝の天徳寺まで江戸をパレードした」

五 幕府は遠藤但馬守、酒井右京亮を全権に任命、一八五九年七月二六日と八月二日の二回ムラビーエフと交渉させた。ムラビーエフは「アムール河はサハリン・ウラと称し、サハリン島（樺太）も二つの名称をもち、アムールと同一のものだ。百七十年前（ネルチンクス条約以前）まではロシアの所領であつたが、その後中国領となり、今回の愛琿条約で再びロシア領となった。五年前ロシアは樺太のアニワに陣營を建てながら、出張の人員少く、警備ができないので、プーチャチンに引払わせ、それ以後は日本で取払ったものだ。しかし同地に対しては外国からの侵略企図があるので、これが防衛のため近く多数の軍隊を送る予定だが、ロシア皇帝から中国と日本との国境は平和的に取極めるよう命令された」とのべた。これに対し日本全権は「北蝦夷（樺太）は往古から日本の所領であつて、これには確かな証拠がある。それは樺太の言語、風俗が日本の古風を存するに見ても明かだ」と答え、下田条約の規定に言及したところ、ムラビーエフは「プーチャチンは択捉島の国境を定めたのみで、樺太に関しては交渉する権限なく、樺太は自分の管轄に属するものだ」と声明し（註四）、次の三条件を提出した。

一 樺太はロシアに所属し、ロシアと日本との国境は、樺太と蝦夷（北海道）との中間のラ・ペルーズ（宗谷）

海峡とすること。

二 現在行われている日本人の漁業活動は永久に継続すること。

三 日本人はアムール河と満州との国境地帯に旅行と移住の自由であること。

これに対し日本全権は「海をもって国境とすることは不可能だが、幕府に報告して回答する」と第一回会談を終えた。

八月二日の第二回会談において日本全権は幕府で審議した結果「下田条約に樺太は界を分たずと規定してあるのだから、北蝦夷（樺太）と蝦夷（北海道）との間をもって国境となすことは断じて認めえない。強いて境界を立つれば、北緯五〇度の東はタライカ、西はホロコタンとし、すなわち樺太を半分にすることに取極めたい」と答えたところ、ムラビーエフは種々な詭弁を弄した後、強硬な態度でかれの提案三カ条の諾否を迫るとともに、日本に樺太を防御する能力があるかを尋ねた。これに対し、日本全権は「人数を送って万全を期す」と答えたので、ムラビーエフは「ロシアとしては樺太全島をロシア領と心得、国境を定めず、そのままにして置きたい。たとえば千島においてロシア人はウルップ島から勝手に南に赴くことができるごとく、樺太においてもロシアの『軍隊』が南に行くことも、南の日本人が北に行くこともできる」とのべ、更に会談を続けたいと申出たが、日本側は「樺太を半分にすることにロシアが同意しない限り、下田条約通り据置く外ない」とのべ、この上会談を続ける必要ないと答え、ムラビーエフとの会談を打切った。

六 この交渉の期間、ロシアの一士官と一水兵が横浜で買物をしている間に殺害された（水戸浪士と推定）。この事件は江戸の外交団を騒がし、主席の英国公使を先頭に幕府に抗議するとともに、日本における外国人の安全に対す

る保障を要求せしめた。しかし江戸に滞在すること月余に及んだムラビーエフは、殺害事件の解決をまつことなく、英国公使と相談の上ロシアの陸軍大佐を残し、八月二六日横浜を去った。

七 ムラビーエフは一八五九年一〇月一八日ロシア皇帝への日本訪問の報告において、「成功しなかったが、宗谷海峡が、依然、太平洋への唯一の出口であり、樺太を日露の両地帯に分割することは、いかにしてもさけねばならない」と指摘し、「樺太の一部が日本領になった場合、第三国（この場合イギリスを指す）が利権をえて、ロシアを太平洋から締め出しうる」と主張し、「樺太南部の占領は不可欠であって、それを行っても下田条約に違反しない」と力説した。ムラビーエフの眼中には、当時の日本は中国とともに第三流の弱国であった。アレサキンダー二世は交渉不成功の部分に対しては「残念だ」とし、樺太南部の占領を提議した部分に対しては「咲は同意する」をしるしている。

八 ムラビーエフの要求と交渉の方法は、プーチャチンが日本人の慣習に多大の考慮を払い、忍耐強く築き上げた、日本人の好意を破壊し去った。かれの日本訪問はプーチャチンのすべての努力を無効にし、強いロシア思想を、幕府の役人間に引起し、日本の一般大衆にも植付けた可能性がある。

ムラビーエフはまたプーチャチンが日本人に種々新しい事柄を教えんとする努力、特に日本で乗船を失い代船の建造を迫られたプーチャチンは、造船技術を日本人に教えんとしたことに反対した。

ムラビーエフによると「日本人はなにごとでも、かれら自身で学ぶであらうから、やがてロシア人を追越すであらう。日本人に教えるよりも、日本人から学ぶべきである」（バルスコフの「ムラビーエフ伝」）。これは半世紀後における日露戦争の結果を予言したともいえる。

## 十 竹内使節と四八度線

一 一八六〇年の北京条約によって全ウスリー地域を中国から譲受けたロシアは、その直後そこにウラジオストック港を設けた。極東におけるロシアの侵略政策は、一八六一年三月から半歳にわたり、対島の占領によって立証された。対島に海軍基地の設置下命された艦長ビレリフは、船体修理の名の下に対島の浅海湾に入港し付近の測量を行って、一八六一年三月四日芋崎浦に進行し、兵員を上陸して営舎を建て、府中藩主に会見し土地の貸与とを要求した。幕府差遣の小栗外国奉行はピリレフに退去を要求したが、かれは上司の命としてこれを拒否した。

露艦のこの行動に重大な関心をもった英国公使オルコックは、安藤閣老に対し露艦の行動は条約違反であって、英国初め他の条約国の共同利益の侵害を構成する。故に英国は幕府の依頼なくとも、独自の立場から、兵力をもって露艦の退去を迫る旨を告げた。英国東洋艦隊司令長官ホープは軍艦二隻を率い横浜を発ち、七月二三日ビリレスに対し強硬な抗議を行い、露艦の行動は遺憾だと露国極東艦隊司令長官リハチョフに伝達方を求めた。一方幕府はロシア政府に対し露艦対島滞留の不法を詰り至急退去を命ずるよう求めた抗議文を、英国公使に依頼して露都の英国大使からロシア政府に伝達させた。その結果露艦は八月二五日対島を退去した。

二 一八六一年四月箱館奉行村垣淡路守は、幕府に対し前年かれがアメリカからの帰途バタビヤで、多数の大砲を

積んだ露艦の修理中を目撃したが、右はいずれ樺太に仕向けられ、日本が守備隊を強化しても無益だから、樺太の国境を確定してロシアの南進を阻止しなければならないと稟議した。

三 幕府は安政諸条約に規定する開港期日の延期を求むるためヨーロッパ諸国に使節を派遣することに決し、一八六一年四月竹内下野守を正使、松平石見守を副使、京極能登守をお目付に任命し、三五人の随員が選ばれた。そのうちには後の外務卿寺島宗則、福沢諭吉（註五）などが含まれていた。使節の一行はイギリス、フランス、オランダ、プロシア、ロシアを訪問することになった。

幕府は使節がロシアに到着した節は北蝦夷（樺太）の国境に関し、ロシア政府と交渉し、北緯五〇度を国境と取極め、五〇度以南のロシア人は引払わしめるよう努め、もしその交渉が成功しない場合は、貸地という建前で些少なりとも地代を払わせ、期限は一年とか短期とすること、もし五〇度境界の交渉が成功しない場合、最後の手段としては西岸はホロコタン、東岸はタライカ、シンノシレトコをもって境界とするよう訓令した。

四 竹内使節団は一八六二年一月イギリスの軍艦で横浜を出発した。開港場の延期交渉は成功裡に終り、同年六月ロンドン条約が調印された。他のヨーロッパ諸国も訪問した竹内使節団は同年八月露都に到着、アレキサンダー二世に謁見した直後、ゴルチャコフ首相兼外相と会見したところ、首相は樺太国境の交渉に関してはプーチャチンもムラビーエフも成功しなかったので、新交渉の再開には極めて気乗りしないが、折角日本の使節団が来訪されたので、前駐支公使で現在外務省アジア局長のイグナチエフ伯をロシアの代表に今任命すると告げた。

日露両国代表は同年八月から九月にかけて前後六回会談した。イグナチエフは問題の性格も樺太の理もよく知っていた。かれは先ず樺太に対するロシアの要求の歴史をのべ、ロシア人が一時樺太を去ったのは、気候と流行病のため



であって、プーチャチンと日本政府との約束のためではないと説明し、日本が北緯五〇度「以南」の全領土を要求する「根拠」を質問した。

これに対し日本代表は北緯五〇度近くのホロコタンまで達するアイヌ人の狩猟活動に、日本の要求はその根拠をもつと答えたところ、イグナチエフは日本が北緯五〇度以南の全領土に対する管轄権を要求するにかかわらず、樺太に日本官憲の存在しない理由を質問した。これに対し日本代表は樺太には日本の行政機構があったが、先年フボストフによってこれらの日本官衛はすべて粉碎一掃されたと答えると同時に、日本の要求は日本の記録が立証するのみならず、外国で作成された地図なら、大抵は北緯五〇度をもって日露間の国境としている。かかる地図はプーチャチン提督の船室にもかかげてあった。露都市内を見物した日本使節団の一員も、ロシア天文台の地図に殆んど同一の領土的区分を示すものを発見したと付言した。これに対しイグナチエフは地図は主権の証拠にならないとのべ、おそらくその地図は旅行者が住民にあなたの国籍はどこかと尋ねたところ、日本人と答えたのでその領土は日本に所属すると想像した結果だろう。ともかく久春内以北の地域、すなわち「北緯四八度以北」にはアイヌ人の在住者はいない。久春内にはロシア人の移住部落があるとのべた上、記録を根拠として（一）日露の国境は北緯四八度線を基礎として引くこと、（二）詳細は現地で解決すること、（三）現実の交渉はニコラエウスクが箱館かで行うとの重大な意見を開陳した。更に重大なことはプーチャチンが樺太の国境問題を交渉する権限をもたなかったため、下田条約は樺太をこれまで通り不分割のまま残す条項を挿入したのだと、ムラビーエフと同一の主張を、イグナチエフ自身の新しい論理で説明している。更にまた重大なことは日本代表がこの北緯四八度線を基礎とする国境の討議を拒否したことである。

次の会議でイグナチエフは樺太がロシアの領土の一部たることを示すフランスの地図を提出した。かれはまた一八五三～五七年まで久春古丹に生活したロシア人に、アニワ以北には土人（アイヌ）のみで日本人はいないと証言させた。次にかれは日本代表に対し、最近日本は急に樺太に官吏を派遣しているが、これは日本自身の発想で行ったことなのか、それとも外国政府に促されてやったことかとの無遠慮な質問を行った。これに対し日本代表は最近の日本の活動は、主としてムラビーエフが日本には樺太を防衛する能力がないと心配しているがためだと答え、現在樺太は江戸幕府の直接管轄下にあると強調した。

ここでイグナチエフは急に話題を転じ、ムラビーエフの後継者たるコルサコフ総督からの報告によると、日本人は土人（アイヌ）がロシア人の仲間になることや、ロシア人の鉱山に使用されることを禁止し、日本人の命令にしたがわない土人を弾圧しているとあるが、かかる行動は日露条約に対する重大な違反を構成するので、皇帝から本件の徹底調査を命令されたと力説した。この声明には満足な回答がえられなければという脅迫がかくされている。

五 交渉の結果をまとめた文案の作成には多大の時間がかかり、討議の末日本側は「樺太の国境」とあった文字を「樺太島上における国境」なる文字に変更するようロシア側を説得することに辛うじて成功した。この合意書は一八六二年九月ゴルチャコフ首相と日本代表との間に調印され、樺太問題は次の文句で表現されている。

「ロシア政府は樺太国境の解決に関する日本代表の提案を受諾しえなかったけれども、この問題を解決せんとする日本政府の熱心な願望に鑑み、ロシア政府は太平洋艦隊司令官カサケビッチ提督に必要な権限を与えることを約束する。司令官は箱館におけるロシア領事を経由して、日本政府と接触し日本の全権委員と会合する」。

竹内使節は一八六三年一月帰国し、幕府総裁松平春巖侯に復命したが、侯は国内の状況困難で、この際樺太問題な

など取上げないことに決定した。

六一八六三年八月ロシア外務省は沿海州知事カザケビッチが全権委員に任命され、談判地ニコラエウスクまでロシアの軍艦を日本全権に提供するからロシア領事と同行されたいとの書簡を幕府に送った。しかしこの書簡には樺太全島に対するロシアの要求が繰返されていた。これに対し幕府は全権の任命もしなければ返事も与えなかった。そこでカザケビッチは幕府に対し、日本政府は樺太の国境を実地見分の上決定するとの約束を放棄したものと認める旨の通告を与えた。

## 十一 小出使節と暫定規則

一 ロシア人の樺太への侵入はつづいた。ロシアの軍艦は大砲を運び、また砲台が導かれた。ロシア人はこの活動をイギリスの樺太攻撃に対する準備だと弁明した。イギリスとアメリカの商船の数はロシアの商船より多いが、軍艦になるとその比例は逆で、当時この地方におけるロシアの軍艦の数は、他のすべての国の軍艦を合わせた数よりも多かった。

一八六五年一〇月箱館奉行小出大和守は、幕府に対し樺太国境を決定する必要を力説し、現地の状況に顧み、「北緯四八度線以北」の領土に対する要求は撤回すべきだと建言した。しかし幕府の外国奉行たちは小出の警報を十分理

解したが、先ず「北緯四九度」の線にロシアの合意をうるため、あらゆる手段を尽し、いかにしてもロシアの合意がえられない場合に限り、譲歩したいとの見解を答申した。そこで老中水野和泉守はロシア外務大臣にあて、さきのロシア外務省からの書簡に言及し、当時日本は国内兵乱のため全権委員の派遣を延引したが、国境問題は捨ておけないので、今回全権委員を露都に差遣したいと申入れた。

二 しかるにこれに対する回答未到着な翌一八六六年二月、久春内の北方地区を巡視中の日本官吏一〇名が、ロシアの陸軍中尉の率いる一分隊に逮捕、殴打、監禁される事件が起った。事件は箱館における小出奉行とロシア領事ビュッオフとの交渉によって円満に解決されたが、小出は問題の根本的、恒久的解決を図らんとして江戸に赴き、再び幕府に国境画定の必要を建言した。

しかし外国奉行たちはロシア南進の勢を防ぐには、露都交渉を進める以外ないこと、また小出の建議する「ウルツプ島から温称古丹島までの千島と、樺太との交換」は、対象に大小の差あり、他国の批判もいかがかと思われるのみならず、地勢上有用の地と無用の地と交換することになる。もしそんな交脈を行ってロシアが樺太全島を所有し、久春古丹を開港すれば、その南侵は防ぎえないから、結局交換は不可だとの見解を答申した。

そこで幕閣は外国奉行たちの見解を容れ、露都に使節派遣を決定し、一八六六年九月小出大和守と石川駿河守を全権に任命し、箱館のロシア領事を経てその旨をロシア政府に通告した。

三 小出使節は一八六七年初め露都に到着、交渉はロシア外務省アジア局長ストレモウホフとの間に、二月から三月にかけ八回行われた。小出使節は樺太に対する日本の歴史的権利の説明を繰返し、もしロシア人がかれら自身を樺太の唯一の所有者とみなすならば、なぜ現地見分を行う委員の派遣に同意したか、おかしいではないかと主張した。

これに対しロシア代表は日本が北樺五〇度線を主張し、樺太の所者権に関する根本問題を提起したため、プーチャチンはこの問題は今後の交渉に延期することを最善と考え、下田条約に樺太の現状維持を規定しているが、これは日本の要求を承認したものではないと反駁した。ロシア代表は更に日本が全権派遣に関する一八六二年の約束を守らなかったのみならず、ロシア政府に返信すら怠っている。この約束違反のため樺太全島はロシアに与えられねばならない。ヨーロッパにおいてはかかる約束違反は許されず、最大の結果を伴う。ロシア政府が依然交渉に応ずるわけは、日本に対する異常な友好的感情に由る。ロシアは日本の国内的困難を知っているが、ロシア政府も同様な困難をもっている。また諸外国との関係、特に国境問題は主たる重要性をもつ問題だ。ロシアは樺太が第三国からの攻撃を受けはしないかと心配しているとのべ、次のごとき提案を行った。

一 ロシアは樺太全島を領有する。ラ・ペルーズの名をもつ海峡（宗谷海峡）を日露間の国境とする。この海峡は両国間の天然の国境である。

二 現在日本人が樺太において享有する一切の漁業権は永久にそのまま残存する。

三 ロシアは現在ロシアに所属するウルップ島を、付近のチエルプリー、プラザー・チエルプリー、ブロートンの三小島とともに、日本の完全な不可争の所有に譲渡する。

四 もし日本がこれらの提案に関し協定を結ぶことを受諾しない場合、樺太はこれまで通り共同所有のまま残す。

樺太全島に対する共有権と千島の一島との交換を内容する「新提案」ではあるが、日本全権はこれを拒否し、ロシアがこれまで既に樺太に対する日本の権利を受諾した証拠として次の事実を提起した。第一はフボストフが樺太を襲

撃した罪でロシアの国法により処罰されていることは、ロシア政府が樺太を日本の領土とみなしたことを立証する。第二はレザノフの補佐官の一人の著書に樺太は日本のものだとのべている。第三はプーチャチンが日本に寄越した文書のうちに樺太の南部沿岸は日本のものと明記していることがそれである。日本全権はまた樺太をロシアに譲渡することは、日本の世論が受諾しないため日本政府は困難に陥るとのべ、更に樺太と千島の一部との交換に対する諸外国の反響をも暗示した後、ロシア全権にこの問題を皇帝に相談するよう要請した。

四 次の会談においてロシア全権はレザノフの補佐官が樺太は日本のものだと書いているとの報告を否定すると、ロシアは樺太がロシアのみに所属すると要求するのではなく、樺太は日露両国に所属するのだと声明し、諸外国の反響に関しては、この問題は他国に関係あることではないと斥け、日本の世論に関しては日本の現存漁業権が尊重されるのだから、ラ・ペルーズ海峡による分割には反対ないはずだとのべた。

ここで小出全権は久春内を北緯四八度をめぐる日露間の国境とする譲歩案を持ち出したが、形勢は竹内使節時代とは変化しており、ロシア代表は頑として樺太全島をロシアに与え、日本はウルップ島その他付近の小島をうくべきだとの主張を固持し、日本がロシアの提案に同意と決定すれば、ニコラエウスクの知事に申出でられたいとのべ、交渉の打切を提議した。

五 次の会談において小出全権は最後の手段として、ロシアは竹内使節団との交渉において、ロシア自身四八度線を提議したことを想起せしめ、四八度線の採用を力説したが、ロシア全権はこれを拒否した。小出全権は再び皇帝と相談して再考されたいと強調したが、日本の提議ははっきり拒否するとの回答であった。

六 小出全権は樺太分割を迫っても無益たることを知り、樺太の共同所有に関する規則案を提出した。それによる

と「久春内と真縫を結ぶ線を引き、互に南北に移住せず、家屋の新建設を制限し、日本が撫育してきたアイヌはこれまで通り取扱う」など、ロシアの膨脹的移植民を抑制する規定が含まれていた。しかしロシア全権は日本の提案は「樺太の分界になる」として同意せず、却ってロシアの対案が審議の結果採用され、一八六七年三月一八日「樺太暫定規則」が調印された。この規則の冒頭には、ロシア全権がさきに提案した四カ条に日本全権が同意しなかったことが規定され、実質的規定としては「日露両国民は樺太島において、いかなる場所に旅行することも、居留地を設定することも、また占有していないすべての場所に建物をつくることも自由である」との条文のみだが、これはムラビーエフが、日本との交渉の節、声明したことで、ロシアにとっては極めて有利、日本にとっては頗る不利な結果になった。

七 一八六七年六月小出使節は帰国して幕府に復命した。幕府は樺太と千島を交換せんとするロシアの提議を拒否したこと、樺太はこれまで通り両属雑居に残すことに決定し、その旨を箱館のロシア領事と各国公使とに通告した。同年十一月幕府は箱館奉行の建言に基き、樺太の移植民を強化する政策を採用し、樺太奥地の産業開発に移住を希望する者は、無制限に許可することとし、九州、四国、中国を除く、各地の武士、百姓、町人の有志の者は箱館奉行に申出るよう布告した。

かくのごとく徳川幕府はロシアとの樺太国境問題を解決しえずして崩壊し、この重要問題の解決は明治政府に残された。

(註一) カムチャツカの発見と征服はウラジミール・アトラソフの事業であった。かれは農夫の伴に生れ貧乏のためウラルの東に移住を余儀なくされ、少年時代から東シベリアの粗野な生活に育成された。レナ河沿岸の移住部落をさまよっているう

ち、ヤクーツク市（一六三二年設定）のコザック兵に徴募され、累進して五〇人の首長に昇った。一六九五年遠隔のアナジルスクに派遣され十五週間を要して目的地に致達した。ここでかれはかねてウワサに聞いた、黒テンや高価な毛皮に富んだカムチャッカの話を、土人から集めた情報によって確認し、一六九六年部下のモロズコーを派遣して、現地を踏査せしめた。モロズコーは数日間でカムチャッカ河に達し、豊富な獲物と好望な情報とを携えて帰ってきた。そこで一六九七年春アトラソフは多数のコザック兵を率いアナティルスクを出発してカムチャク半島に向った。途中部隊を二分し、自分はオホツク海の沿岸を南下し、モロズコーには太平洋岸を南下せしめ、両者はカムチャッカ半島の全部を跋涉して、南端のロパトカ岬で会合した。しかしアトラソフは少数の部隊ではカムチャッカの保持は不可能だと悟り、一七〇〇年七月ヤクーツク市に赴いたところ、かれの功業の重要性を知った市民たちは、かれをモスコーに送ることにした。一七〇一年首都に到着した「カムチャッカの征服者は、百年以前功業をたてながら途中で溺死したイエリマックに代って、モスコーを訪問して大歓迎をうけた副官イバン・コルトゾーのそれと同様な市民の昂奮であった。しかしカムチャッカに対するロシアの主権が確立されたのは一七〇七年末を待たねばならなかった。

（註二） ピーター大帝は一七二一年一月一日自らアメリカを隔てる海峡を調査する計画の立案に着手したが、翌年一月二八日死去したためこの計画の完成はカゼリン一世に継承され、その実行はロシアに傭聘（一七〇三年以来）中のデンマーク人ベーリングに委託された。ベーリングは一七二七年八月二日二十三名の技術者と水夫を伴い、オホツク港を出帆し、翌年ベーリング海峡を調査して帰還した。実はこれより八〇年以前シモン・デジネフなるコザックの航海者は、一六四八年六月二〇日コリマ河の河口から出発して、アジアの北東全部の沿岸を航行し、デンマークの航海者がかれの名を与えた海峡を通過し、同年一〇月アナディール河口に到達している。

（註三） 露米会社は文字の上からは、恰も露米両国の政府または人民間の合弁会社のごとく見えるが、実体は純然たる露国会社であって、露米の名を冠したわけは、この会社の活動地に、一九世紀半ばまで露国が領有した米大陸のアラスカ半島と付近の小島が含まれていたからだ。この会社の「性格」は一七世紀に組織されたイギリスおよびオランダの「東印度会社」に類似する植民会社の一種である。

一七九五年七月「露米会社」と改名、改組された団体は、その後ロシア皇帝の直轄下におかれ、一七九九年七月政府の条例をもって(1)会社は北緯五五度以北のアメリカ西北岸とカムチャッカの北方、並に南は日本まで散在するアレウト、クリル



(千島) 諸島の港湾を使用しうること、(二)北緯五五度以南のみでならず、外国の占領しない土地を発見すること、(三)鉱物の開発は会社の独占たること、(四)勅許をえて隣国と通商航海すること、(五)必要の土地に移住地と堡壘とを建設し、アメリカに船舶をもって商品を送ること、(六)自由民を雇入れること、(七)必要に応じオホツク地方の木材を採伐すること、(八)現金でイルクック兵器廠から火薬四・五〇ポンド、ネルチンスク官廠から鉛二〇〇ポンドを買入れうること、(九)前記区域内における毛皮業と漁業は二〇年間会社の独占とする「特権」が与えられ、かつロシア政府は陸海軍をもって会社の事業を保護し、アレキサンダー一世のご一家は会社の株主になった。

特派大使として日本に派遣され、使命を達成しえなかった腹いせに、海軍将校を雇って樺太千島における日本人の事業を冠略破壊したレザノフは、露米会社の前身たるシエレホフ商会の主人シエレホフの女婿であって、かつて官吏、露米会社露都支店長を勤め、帝室との関係を結び、政府の保護をえ、会社の振興を図った人物で、日本との通商も岳父の遺志であった。

一八二一年満期になった会社の特権は更に二〇年延長され、新条例で会社従業員は官吏と同一の特典を与えられ、「事業区域」は北緯五一度のバンクーバー島からベーリング海峡に至る北西アメリカ大陸、沿岸島、シベリア大陸、ウルツプ島に至るクリル諸島となった。この年九月ロシア政府は露米会社の事業区域と同一区域における通商、毛皮業、漁業、捕鯨、航海業を、ロシア人の独占とし、外国船の入港を禁止する有名な勅令を発し、「公海自由」の原則に背反するため英米との間に紛争を巻起した。一八三〇年代には英米の毛皮業者と捕鯨業者、特にハドソン・ベイ会社が有力な競争者として現われた。一八四四年露米会社の特権は再び延期され、移住地の総支配人は海軍将校たることが条例で定められた。一八六三年の職員数五三〇人、移住民一〇、一二五人、所有船舶一二隻、うち一〇隻は一二〇トンから九〇〇トン、いずれも大砲をもち、他に二隻の捕鯨船があった。しかし露米会社もイギリス側の競争、本国政府の政策変更などで、一八六三年解散し、アニスカとアレウトは一八六七年アメリカに売却された。

(註四) 下田条約は一八五五年六月六日アレキサンダー二世の批准をうけ、その批准書交換のためポシエト大尉が日本に派遣され、日本からは勅許をえて一八五六年十一月老中五名連署でネッセルロード首相に批准書交換済の書簡を送っている。今更プーチャンチンに「権限がなかった」などとは、ロシア外交の伝統たるプラッフの甚しいものにすぎない。

(註五) 通訳として随行した福沢諭吉は、ロシア側の待遇が他のヨーロッパ諸国とちがって日本人向きになっていたことを

「福翁自伝」に書残している。室内には刀掛け、寢床には木の枕、箸、茶碗から、食事も日本風に調理されていた。これは日本人が手配したものとのウワサはあったが、日本人には会わなかったとある。実は一八五五年橋耕斉なる日本人がロシアに逃亡し、日本語の教師として用いられ、一八五七ゴシユケビツケ（後の箱館領事）と共同して「日露字典」をつくった。この珍しい字典がアメリカの国会図書館に一部所蔵されている。橋は自らヤマトフ（大和）とよび、日本の使節団を待遇した一切の準備の責任者であった。かれは明治維新後、岩倉使節団に自分をあかした。かれはロシア政府から賞をうけ、帰国後は日露関係の育成に活動した。

参考文献

- (1) 「日露交渉吏」、(外核務省政務局が田中文一郎氏に依依し、外務省の記録に基いて編集せしめたもので、第二次大戦後一九六九年まで秘密文書であった)。
- (2) Berton. P. A. The Russo Japanese Boundary. 1850—1875, PP. 11—46